
生まれ変わっても。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わつても。

【Zコード】

N1043M

【作者名】

はなちょう

【あらすじ】

愛する人と結ばれないのなら、私は死を選びます。
そんな主人公が貫いた一つの愛。

寿命だつた人間と自ら命を絶つた人間の魂が行く場所は同じ場所で。

ただ。

自ら命を絶つた人間は次に生まれ変わる時は人間にはなれないんだよ。

そう言って、小さな頃から遊んでくれた隣の家のお兄ちゃんが私に意地悪な笑みを浮かべた。

その時の私には。

お兄ちゃんが去り際に言った。

「バイバイ」の本当の意味を理解することができなかつた。

お兄ちゃんの笑つた顔を見たのは。

それが最後だつた。

「冬子」

そう呼ばれて私はハツとした。

大きな手が私の右手を包んでいる。

昭一が目を細めて大きな夕日を見た。

そして静かに言つ。

「愛してる、冬子」

私は昭一の顔を見た。

「私だつて・・・・・」

涙が出そつなのを必死でこらえた。

あたたかい。

昭一の手はなんでこんなにあたたかくて安心するのだろう。

「私、やつぱりあの家を出るわ！」

私がそう言つて昭一の手をさつきより強く握つた。

「ダメだ！ そんなことをしてはダメだ！ そんなことをしたら君も僕も・・・・」

「あなたと離れなくてはいけないのなら生きてる意味なんてない」

私は昭一の顔を真っ直ぐ見た。

昭一が何か言おうとした時だった。

「冬子ー！」

遠くで私を呼ぶ声が聞こえた。

「・・・・・・お父様だわ・・・・・・」

「家に帰るんだ。僕はこの村を出て行く」

昭一はそう言ひと私の手を離した。

小さくなる背中に。

その愛しい背中に。

すがりつく」とさえ許されない。

私達は決して結ばれない運命だった。

あたたかい。

あなたの手はとてもあたたかい。

優しくて安心する。

だけど。

そのあたたかさは。

もう一度と触れることのできないモノだった。

自ら命を絶つた人間は次に生まれ変わる時は人間にはなれないんだよ。

あの時の、お兄ちゃんの言葉がふと浮かんだ。

「そうかもしれないね」

私はそう言つてふつと笑つた。

右手にグッと力をこめた。

涙が頬をつたつた。

「だから確かめに行くよ」

私はそう呟くと。

銀色に光つているソレを見つめた。

赤い華が咲く。

床、一面に。

昭一の顔が、浮かんだ。

私とあなたなら、きっと分かる。

前世で愛を誓い合つた二人ならきっと。

男の人が私を見た。

私は男の人を見上げた。

しばらく。

男の人は私を見つめてから私を抱き上げた。

「なんだ。家はどうした？」

男の人はそう言つて優しい目で私を見た。

「雄太。何してるんだ？」

別の男の人が来て、私を抱いている男性に声をかけた。

「ああ」

雄太と呼ばれた男性は私を見て言った。

「コイツ捨て猫だよ」

また戻つて来られた。
あたたかい手に。
だけど。

今度はあなたに伝えることさえできない。

ねえ。

愛してるよ。

生まれ変わつても。

人間じゃなくたつて。

あなたの姿が変わつてしまつた今でも。
ねえ、昭一。

私と雄太は一緒に暮らし始めた。

雄太は私のご主人様となつたのだ。

だけど。

三年ほどして雄太は病に倒れ、一度と私を抱き上げることはなか
つた。

私は雄太の住んでいた小さな小さなアパートで一匹で暮らした。

毎日、神様に願つた。

私を早く連れて行つていてください。

雄太・・・・・いえ、昭一の元へ。

雄太がいなくなつてから。

時間がとても長く感じた。

前に一度見たことのある眩しい光が見えた時。
心の底からホッとした。

私は静かに目を閉じた。

今度、生まれ変わつたら。

絶対にあなたの傍を離れない。

「なんだよこの悲しい結末は！ 猫が可哀想だらつー。」

「後ろで、そんな声がした。

私は驚き、慌ててノートパソコンを閉じた。

「なんですか先輩！ 勝手に見ないでくださいよ！」

「いやあ。珍しく有沢が何か書いてるって思ったからわ」

そう言つて新川先輩が笑つた。

細い目がさらに細くなっていた。

「どうせならサークルの方の書いてよ。部長に任せると口クなもんにならないから」

「じゃあ先輩が書けばいいじゃないですか」

「俺は無理。文章書くの嫌いだし」

先輩はそう言つて窓の外を見た。

部室は静かで、私と先輩しかいなかつた。

「先輩」

「ん？」

スラリと伸びた長身。

その体が太陽に当たつてキラキラして見えた。

「先輩が持つてなくて私が持つてるモノつて何だと思いますか？」

私の言葉に先輩が不思議そうな顔をした。

そして首をひねつた。

しばらく考えてから、先輩は思い切り自分の両手を叩いた。

「コーヒーおーじってほしつてことだな！」

「え？」

「しょーがねーなあ。俺だってたまには後輩に奢るつーの！」

先輩は何だか楽しそうにそう言いながら部室を出て行つた。

私は窓の外を見た。

太陽の光が眩しい。

空が青い。

「生まれ変わる前の記憶」
私は空に向かつて呟いた。

私が持つていて。

先輩が持つていないモノ。

それは。

生まれ変わる前の。

前世の記憶。

「昭一」

私は一言、呟いた。

「おまたせー。アイスでいいよな」

部室のドアが開くなり新川先輩がそう言った。

「はい」

先輩が一つの缶コーヒーを右手で私に差し出した。

私は手を伸ばした。

先輩は驚いて私を見た。

私の手は先輩の左手を掴んでいた。

あたたかい。

あなたの手はとてもあたたかい。

優しくて安心する。

あなたの姿が変わってしまっても。

唯一、変わることがないのは。

この手のあたたかさだけ。

すると。

私の右手が強く握り返された。

先輩は優しい声で私に言った。

「おかげり」

(こちめ)

(後書き)

読んでくれてありがとうございました。
これも数年前に書いた話です。

最初は猫のところで終わりにしてみたと想つたんですが
それではこくらなんでも可哀想だと想い、こういつ形になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043m/>

生まれ変わっても。

2010年10月8日14時36分発行